

超闘戦士コア・クロソル～☒魂を継ぐ☒伝説の光の超戦士と☒想いを届ける☒幻の光の使者～

タイタヌ総帝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太古の昔に存在したと言われる幻の超古代文明“ヤマトノ國”、それは遙か遠い昔、地球が誕生するずっと前に存在をしていた、神や悪魔をも越え存在を恐れられた者、または悪魔や神々の先祖とも呼ばれる原生種族が納める国が存在していた。ヤマトノ國の切り札して“最強の戦士”の称号と力を継承した青年、

“藤原龍星”は十年の修行を経て、故郷たる世界とその日本に帰って来た。

超闘戦士とは

愛する者を守るため光の戦士で、この世界と異世界から存在する怪

獣や幻獣、偉人や超人、魔法や科学の力を継承し、その力（ソウルクリスタル）で戦う。

そんな彼はこの地で戦う幻のプリキュア、キュアエコーにして幼なじみでもある、坂上あゆみと共に横浜市の街を守り続ける。

これは、超闘戦士に変身する青年と幻のプリキュアに変身する少女とその仲間達との繰り広げられる物語である。

「我！邪を打ち!!絶望を翔け抜ける!!超闘戦士！コア・クロソル!!!来・陣!!」

プリキュア×オリ主（最強のチート野郎）

注意事項

これは、作者の興味範囲による二次小説作品のため

キャラ崩壊あり

映画（オールスターズ）しか知らない為キャラクターの性格等の改変と原作改変ありの作品でございます。

以上！

頑張って書いていきます!!

目次

設定と登場人物

| | |
|----------------------|----|
| 登場人物その1＋プリキュアオールスターズ | 1 |
| Reunion ～再会の物語～ | |
| 第0話 プロローグ ～再会の前～ | 19 |
| 第1話 二人の再会 | 31 |
| 第2話 公園での会話と挨拶訪問 | 69 |
| 第3話 真っ赤な許嫁と心配する相棒 | 83 |

設定と登場人物

登場人物その1＋プリキュアオールスターズ

主人公

ふじわりりゅうせい
藤原龍星

年齢 16歳

性別 男

本作主人公で超闘戦士“コア・クロソル”に変身する青年。坂上あゆみの友達にして、両家親族公認の許嫁恋人でもある。普段はマイペースで優しくたまに子供っぽいところがあり、正義感と自身が決めたことはまっすぐ進む性格、仲間思いの一面もある。それに踏まえて家事や手伝いに料理、車やヘリコプターと飛行機の運転も可能で何でもできるハイスペック超人。普通の学生より少し(?)大人びている青年であるが、その正体は太古の昔に存在したと言われる幻の超古代文明“ヤマトノ國”の末裔にして、超闘戦士コア・クロソルの継承者でもあった。

10年前両親と共に発掘の現場に来ていたのだが、突如現れたテログループの奇襲攻撃により両親が目の前で撃たれ、自分も重傷を負い崖から落とされた。しかし、辛うじて生きており、残っていたヤマトノ國の遺跡に一人だけ残されていた。その時に声に導かれるように遺跡の中に入り奥深くに存在する神殿にガントレット型アイテム“クロソルガジェット”とアクセサリ・ネットワークスの“クロスソウル”を手にし、邪悪な者達から地球世界と愛する者を守るために戦う決意をし、超闘戦士コア・クロソルの力を継承する。その後、異次元に飛んで行き一人武者修行の旅に出たが、ヤマトノ國と戦った敵対種族の末裔達による奇襲攻撃で重傷を負い、そのまま拉致されてしまう。その後、龍星は彼らの僕しもべとして人体実験により感情と心無くした

大量破壊兵器
殺人鬼（彼らからは怪物兵器”X”）になってしまふ。しかし、心を取り戻したクロソルの魂の叫び、さらには家族とあゆみ恋を思い出すことによって自分自身を取り戻し、敵対種族と組織を壊滅する。壊滅後、クロソルが生前修行で使われていた世界に行き、魂たちとその世界に住む人々に鍛えてもらうことになった。その後別の異世界を転々と移動をし、様々な人々と交流しながら武者修行をしていきようやく元の世界に帰還をし、藤原芹沢両家の大豪邸玄関前で再会を果たした。元の世界では10年の月日が経っていたのだが、彼が異次元世界で修行していたときは数十年の月日が経っていた。そのために姿状は16歳の青年だが中身精神は二十歳以上の男性に当たる。

相棒”コアスル”

アクセサリー・ネックレス、クロスソウルに宿っている付喪神霊魂で龍星の良き相棒である。しかし、その正体は”初代”超闘戦士コア・クロソル”本人である。過去の戦争で勝利したものの、力尽き戦死した。

〈家族〉

事件前は父親の藤原誠ふじわらまこと母親の藤原春見の三人で暮らしていた。しかし、両親がテログループの襲撃事件で死んでからは祖父たちの藤原夫妻と芹沢夫妻せりさわ両家共に横浜の実家で暮らしている。

藤原誠ふじわらまこと

龍星の父親でフジセリ大財閥社長兼次期会長である。元自衛官にして、国連祖父達が組織したアークス隊の大隊長を勤めている超闘戦士コードネーム”ガンカタ”である。マイペースで心優しい性格で仕事になると真面目で（少しだけ）厳しい一面を持つ。妻の春見とは高校からの同級生でもあった。そんな春見に当時惚れていたが話す機会が少なく卒業後すぐに離れ離れになっていたが奈良にあったヤマトノ國の発掘していた芹沢財団の発掘隊が襲撃に合い救助をした時に、春見を助け出し、その後1年の交際の果て（藤原家と芹沢家、両親族の策略もあり）結婚をした。10年前の事件で傷を負い遺跡の近くで介護されるが一番重傷を負っている息子の命を助ける為に母親の春見と共にヤマトノ國の神殿に入りその場にあった石化したクロソルガジェットを復活させるために波動氣を宿し、死亡する。享年30歳。

ふじわらかすみ
藤原春見（旧名芹沢）

龍星の母親で日本国際大学の教授並びに世界各地を飛び回り超古代文明専門の考古学をしていた。実家の“セリザワグループ”の総帥“芹沢初羅”の愛娘であり、千年に一度現れる絶世の美女でもある為、高校の頃は物凄くモテていた。しかし、それが原因で好きだった当時の誠の思いを告げずに月日だけが過ぎ、卒業した。その後、大学に入り、奈良に眠っている古代遺跡を調査していた。しかし、そこに現れたテログループに捕まり諦めかけた時に再会した誠本人に助けられ再び一目惚れをし、恋心を再加熱させ、交際し結婚をした。その後、龍星を産み三人で暮らしていた。こちらも同様10年前ヤマトノ國の遺跡発掘をしていたときにテログループの襲撃に合い傷を負い、誠と共に龍星を助ける為に波動氣をクロソルガジエッターに宿し、死亡する。享年30歳。

ふじわらはじめ
藤原初

龍星の祖父でフジセリ大財閥の社長代理にして同社の会長でもあり特殊部隊アークスの創設者、及びその隊の初代隊長の一人でもある。セリザワグループ総帥の芹沢初羅とは小学校頃からの大親友で、誠と春見の結婚をしたときに初羅との話し合いで2つ企業を一つにしたフジセリ大財閥の創設を発案したのも彼であった。また彼もアークス隊の初代隊長であり超人的身体能力を備わっている。その輝かしい功績から日本の“真の防衛大臣”又は“日本一の自衛官”とも呼ばれているため国連や世界各国の政治達にまで至る所で友人やライバルがいる。その為、孫龍星から“スーパーお祖父ちゃん1号”または“初はじめじいちゃん”と呼ばれている。

ふじわらはるな
藤原春菜

龍星の祖母で藤原初の妻。現在彼女は芹沢初羅の妻“芹沢雪”と共に農業をしており、今では農林水産業専門の会社“春雪”を設立して無農薬野菜を作って近くの近所に販売している。最近では全国に拡大販売を考えており、副社長の発案によりインターネット販売を始めており、春雪の社長をしている。孫龍星からは“春はるばあ”または“春ばあちゃん”と呼ばれている。

芹沢初羅^{せりざわはつら}

龍星の祖父で大企業セリザワグループの総帥にしてフジセリ大財閥の副会長でもあり、また彼も特殊部隊アークス隊の創設者の一人でもある。初とは小学校頃からの大親友^{ライバル}であり、フジセリ大財閥の創設の時はノリノリで発案に乗った。彼もまた初と同様の功績を納めているため、日本の“影の首相”または“裏の大統領”とも呼ばれているため、孫^{龍星}からは“スーパーお祖父ちゃん2号”または“初羅じいちゃん”とも呼ばれている。

芹沢雪^{せりざわゆき}

龍星の祖母で芹沢初羅の妻。彼女も藤原春菜と共に農業会社春雪を営業しており無農薬野菜を二人で販売している。彼女の発案により主にインターネット販売を担当している。春雪の副社長をしている。孫^{龍星}からは“雪ばあ”または“雪ばあちゃん”と呼ばれている。

〈実家〉

場所は横浜市にある東京湾沿いにある、“四季嶋島”の大豪邸にいる。元々は藤原家と芹沢家は島の島民でしかも、ご近所さんだったためによく話をしていた。そのため今でもライバル兼親友になっていた。誠と春見の結婚の時に2つの家を1つに合併することを夢に見ていたため、大豪邸に住むことにした。当初、遊びに来ていたプリキュアオールスターズの一部を除く面々とあゆみ曰く「家がめっちゃくちゃ大きく迷子になった。」とのこと。敷地面積は東京ドームの20倍でその地下には特殊対策攻防部隊“アークス”の基地がかなりの巣のように広がっている。

〈坂上あゆみとの関係〉

10年前の春にあゆみと同じ地区に引っ越ししてきた。最初は彼女自身の人見知りの性格で上手く言えなかった。しかし、あゆみがいじめられ、泣いていた時に側に駆け寄り励ましてくれていた。その日以来あゆみは龍星に掘れて恋心を思うようになりよく話し、遊んだり

もした。その後、二人は婚約の約束をして、更にそれを影で聞いていた両親達（あゆみの家族含む）は大盛り上がりして両家親族大会議の末、“両家親族公認の許嫁”となった。しかし、家族旅行兼ねての発掘調査をしていた時にあの事件が起こり龍星と両親が行方不明になり、会えなくなつた。さらには当時両親達の仕事であゆみ自身も他の学校に転校しており離れ離れになった。それから、10年後の横浜で二人は再会する。

〈超闘戦士コア・クロソル〉

数万年前に存在した幻の超古代文明“ヤマトノ國”に出てくる伝説の戦士。太古の昔に異世界からやってきた邪悪な者達から平和を愛した人々を護るため、オーパーツと^{たましい}靈魂等の力を結晶化した“ソウルクリスタル”という力で戦う。長きに及ぶ戦争は地球と宇宙、異世界も壊しかけないほどまでなり、クロソルともう一人の巫女姫と共に戦い勝利をした。しかし、あまりの力を消費したためクロソルは光の粒子状のなつてクロソルガジェットとネックレスの中に宿し石化した。しかし、勝利したのもその思いはむなしくヤマトノ國は崩壊してしまう。生き残つたヤマトノ國の民と巫女姫等の王族達は神殿を造りその中にネックレスとクロソルガジェットを飾り付けることにしその後、民と巫女姫はひっそりとその地に暮らしていた。しかし、誰にもその伝説を知られておらず知っているのはヤマトノ國の末裔と一部の者達しか知られていない。その姿は、古代の鎧（甲冑と言ふより若干和の鎧を意識した物）と現代技術を組み合わせた戦闘用強化外骨格である。その実力は図りかねており、プリキユアオールスターズとほぼ同格あるいはそれ以上の実力を持っているはずが、龍星^{クロソル}本人曰く『俺より、オールスターズの方が一番強い』とのことである。

究極の力“ソウルクリスタル”

怪獣や幻獣達に異世界から現れた魔法や科学技術の^{たましい}靈魂やエネルギー

ギー、能力、エレメントを六角形のボール状に結晶化した物体。大きさは手のひらより小さくなっている。無限大の力を秘めておりその力を邪悪な心を使えし者が使用すると身体は怪物又は怪人の姿に豹変する。しかし、豹変した人はクロソルか、又はプリキュアの浄化で元に戻る。

究極物質体”イクロマナノニウム”

クロソルの武器装備には、イクロマナノニウムと言われる超物質で使われており、龍星達アークスの技術者達からは”超越物質体” または”オーバートেকノロジー 超古代のマイクロナノマシン” と呼ばれており、近年発見されたばかりの未知の物質で使われている。この未知のエネルギー物質体を使えるのはアークスの部隊とその部隊長龍星と古代ヤマトノ國の者達だけである。この金属はアークス隊の防弾チョッキに専用車では防弾ガラス、壁の防壁等にも使用している。イクロマナノニウムはチタン合金やダイヤモンドの数万倍の硬度、ウランやプラズマの数千倍のエネルギー源を持つもので実に多様性も多く実質上世界一を誇るほどとなり、防御にも攻撃にも有効である。

クロソルの武器装備

イクロマナノニウムによる超金属によるものでできた武器装備含め全て使用されており、耐熱耐寒性も備わっており宇宙空間等の厳しい環境下の中でも行動可能である。またクロソルが使う全ての武器装備にはソウルクリスタルをはめ込むことができ、その力での攻撃ができる。

変身アイテム”クロソルガジェット”

ヤマトノ國に伝わるガントレット型のアイテムで武器にもなる。一説には”究極の魔神機器”とも呼ばれている。このアイテムを使えるのは継承者の龍星しかおらず、無理に使おうとすると祟りが起きるとされており実際にその祟りで負傷者は続出している。普段は腕時計と腕輪（龍の紋章がついている）の形にしているが、本人の意思でガントレットに変わる。魔法の力と科学技術の力を融合しているため2つの力を使えることができる。よって通信や連絡、物体の移動または転送さらには魔法での魔術やモンスターの召喚、またそのまま

でも格闘戦も可能である。

クロスフュージョンモード

ガジエッターから現れた、×形の円陣をしたもので構成しており、各5つの穴にソウルクリスタルを差し込み、変身したりフォームチェンジしたりする。

スクイーパーモード

銃と剣を組み合わせたもので近接戦闘から遠距離での狙撃が可能になっている。変身なしでの使用、二刀流攻撃も可能にしてある。

クロスソウルクリスタル

初代クロソルの魂が宿っているアクセサリネックレス。変身のときに輝きアクセサリから六角のボール状のソウルクリスタルに変わる。真ん中にはヤマトノ國の守護獣、ゴガーラを模した龍の紋章が付いている。

クロソルの武器一覧

日本刀“せいりゅうけん星龍劍”

クロソルのメイン武器。別名“黒刀星龍劍”とも呼ばれており、その名の通りで刀身が黒色になっている。しかしその切れ味は抜群。

救世主クロソルの愛用の聖劍“コア・キャリバー”

クロソルのもう一つのメイン武器。初代クロソルが使用していた聖劍でこちらも星龍同様の切れ味を持っている。

合体大斬劍“クロソル・ブレイドソード”

五つの刀剣が合体をした両手持ちの大剣。元々は五人の戦士達が持っていた伝説の刀剣であり、クロソルと龍星の心ブレイドソードの魂にシンクロ時の応用よって合体する。刀身は巨大で機動力は劣るものの威力と攻撃範囲は高い。

変幻自在の槍棒“トランス・ロッドスピア”

使い分けることができる槍棒で“鎌槍”、“薙刀”、“ガンランス

”、“ハイパーランス”、“トマホーク”、“ランサー”、“サイズ

”、“魔法による攻撃、魔術による召喚ができる”、“ウィザードロッド”と格闘棒術による攻撃ができる“コンバットロッド”等々の使いわけができる。

一撃大鎚“グランドハンマー”

両手持ちの巨大ハンマーで機動性は劣るがその威力は高く一撃粉碎の大打撃を決めるのに使っている。モードによって使い分けが可能の為、棍棒とハンマーの二種類ある。

格闘術機動特化”スマッシュトンファーマームズ”

左右の手に持って使う近接武器でクロソルの格闘術を駆使して攻撃する。

射出類

遠・中距離射出”クロスアロー”

クロソルの武器で中距離を弓の”クロスアロー”、遠距離を”クロスボウガン”で攻撃ができる。

クロスソウルフォーム

クロソルの基本フォームでクロスソウルのネックレスをクリスタルに変え、そのクリスタルをはめ込み変身した姿。その姿は強化外骨格が身に付いており、全体の色合いは灰色、バランスタイプのフォームになっている。

ゴガールフォーム

クロスソウルフォームにゴジラ、ガメラ、クロストラゴン、魂龍こんりゆうの4つのクリスタルを差し込み変身した姿。その姿はクロスソウルフォームにマントと腰にスカートみたいなものが代わり、強化鎧”ギガステイツクアーマー”を付けている。これはクロソルガジエツタ―（籠手）を強化をし、さらに付け加えてクラッシュャーシューズ（具足）、ディフェンドボディ（胴または胸当て）のアーマーを展開し、攻撃と防御のバランスをさらに上げたものになっている。全体の色合いは黒と銀の混ざった色になっている。

〈変身までの過程〉

その1

「始動！トランス・クリエーション!!」

腕時計と腕輪がガントレットクロソルガジェットに変わり、同時にクロスソウルが光り、アクセサリーからクリスタル（クロスソウルクリスタル）に変わって手に持つ。

その2

「クロスソウル・セット!!」

クロソルガジェットをクロスフュージョンモードに切り替え、切り替えた後、クリスタルをはめ込む。

その3

「我、邪を取り払う希望の光になりて、その力を、今、解き放つ!!」
クリスタルをはめ込んだクロスフュージョンを前に向ける。

その4

「変身!!」

クロソル・ガジェットから現れたクロスフュージョンモードの後方にある紋章を押す。

その5

彼の回りから光の円柱が現れ、覆い隠し服装が変わる。

その6

「我！邪を討ち！絶望を翔け抜ける！超闘戦士コア・クロソル!!来陣
!」
変身完了する。

その7

「邪気を放ちし者よ。……………いざ、参る!!!」
戦闘体制になり、決め台詞を言う。

〈技〉

クロソル・ウエーブショット

エネルギー光弾を放つ基本技^{メイン}でよく使う。正式名“波動気光弾”

クロソル・ウエーブブレスト

ウエーブショットの強化されたもので威力は高め。正式名“大波動気光弾”

クロソル・コアストラクウェブス・バースト

クロソルの大技でウエーブブレストの数倍の威力がある。正式名

“波動気光波”

クロソル・インパクトフィスト

衝撃波を放つ技で敵を一網打尽にする。正式名“衝撃拳”

クロソル・バーニングフィスト

拳にエネルギーを集中させ攻撃する技。クロソル・インパクトフィストの強化されたものとなっている。ガメラのバニシングフィストに似ている。正式名“爆裂剛衝撃”

クラッシュキック

足にエネルギーを集中させ蹴る技。仮面ライダーのライダーキックと同じである。正式名“衝撃蹴脚”

ウェブスプラズマスラッシュ

刀身にエネルギーを集中させ、斬撃を飛ばす技。刀身の大きさによって攻撃する。正式名“波動気閃光斬撃”。

ヒロイン

坂上あゆみ

本作のヒロインで幻のプリキュア、キュアエコーに変身する少女。横浜で母親と二人暮らしをしていて彼女の父親は現在仕事で海外出張中である。妖精のグレルとエンエンと共に横浜に現れる悪しき者と日々戦い守っている。学校が終わり家に帰宅をし、街中で歩いていたときにナンパ男達に絡まれていたときに龍星に助けられ、また同時に彼との再会をする。幼き時に自身の人見知りでいじめられ、1人泣いていた時に彼助^{龍星}けられており、そのときに一目惚れをし恋心を思っていたが、事件により行方不明になり時が経つに連れて忘れてしまう。10年後、再会した龍星とのことを母親に話をしていた時にあゆみの母親から許嫁が彼であったことと彼の行方不明で海外から帰って来たことを知り、1人ひっそりと告白の練習をしている。その後、恋心を知った彼女の友達^{同級生}とプリキュアオールスターズ一同から応援して貰っている。

キュアエコー

あゆみと妖精^{パートナー}のグレルとエンエンの思いのシンクロによって変身するプリキュアである。突如姿を現したプリキュアのため、個々のグループでは1人だけになるが龍星が超^{コア・クワソル}闘戦士の力を継承したため二人でコンビを組み横浜市を守ることになり頑張っている。

グレル

あゆみ^{キュアエコー}のパートナーで少しヤンチャな妖精。タヌキのような姿の妖精で木の剣とマントを着けている。龍星^{クワソル}をよき兄貴として慕っている。

エンエン

あゆみ^{キュアエコー}のもう1人のパートナーで大人しい性格の妖精。キツネのよ^{クワソル}うな姿の妖精で頭巾を着けている。龍星^{クワソル}をよきお兄さんとして慕っている。

プリキュアオールスターズ

おなじみのプリキュアオールスターズで坂上あゆみキュアエコーと
藤原龍星コア・クロソルと共に戦い、遊んだりしている。(テレビの終了後又、
原作変更しています。ご了承をお願いします。)

ふたりはプリキュア& a m p ;ふたりはプリキュアMaxHear

t

人物

美墨なぎさ／キュアブラック

雪城ほのか／キュアホワイト

九条ひかり／シャイニールミナス

妖精

メツプル (なぎさのパートナー)

ミツプル (ほのかのパートナー)

ポルン (ひかりのパートナー)

ルルン

ふたりはプリキュアSplashStar

人物

日向咲／キュアブルーム／キュアブライト

美翔舞／キュアイーグレット／キュアウインディ

妖精

フラツピ (咲のパートナー)

チョツピ (舞のパートナー)

ムーブ

フープ

協力者

霧生満

霧生薫

Yes!プリキュア5& a m p: Yes!プリキュア5GOGO!

人物

夢原のぞみ／キュアドリーム

夏木りん／キュアルージュ

春日野うらら／キュアレモネード

秋元こまち／キュアミント

水無月かれん／キュアアクア

妖精（人間態）

ココ／小々田コージ

ナッツ／夏（ナッツまたはナツ）

ミルク／美々野くるみ／ミルクイローズ

シロップ／甘井シロー

フレッツシユプリキュア！

人物

桃園ラブ／キュアピーチ

蒼乃美希／キュアベリー

山吹祈里／キュアパイン

東せつな／キュアパッション

妖精

シフォン

タルト

協力者

カオルちゃん（本名 橘 薫）

西隼人

南 瞬

ハートキャッチプリキュア！

人物

花咲つぼみ／キュアブロッサム

来海えりか／キュアマリン

明堂院いつき／キュアサンシャイン

月影ゆり／キュアムーンライト

妖精

シプレ（つぼみのパートナー）

コフレ（えりかのパートナー）

ポプリ（いつきのパートナー）

コロン（ゆりのパートナー）

スイートプリキュア♪

人物

北条響／キュアメロディ

南野奏／キュアリズム

黒川エレン／キュアビート

調辺アコ／キュアミューズ

妖精

ハミイ

フェアリーストーン

ピーちゃん

スマイルプリキュア！

人物

星空みゆき／キュアハッピー

日野あかね／キュアサニー

黄瀬やよい／キュアピース

緑川なお／キュアマーチ

青木れいか／キュアビューティ

妖精

キャンディ／ロイヤルキャンディ
ポップ

ドキドキ！プリキュア

人物

相田マナ／キュアハート

菱川六花／キュアダイヤモンド

四葉ありす／キュアロゼッタ

剣崎真琴／キュアソード

円亜久里／キュアエース

妖精

シャルル

ラケル

ランス

ダビィ／DB

アイちゃん

協力者

レジーナ

ジヨナサン

ハピネスチャージプリキュア！
人物

愛乃めぐみ／キュアラブリー

白雪ひめ（本名）ヒメルダ・ウインドウ・キュアクイーン・オブ・ザ・

ブルースカイ）／キュアプリンセス

大森おおもりゆうこ／キュアハニー
氷川ひかわいおな／キュアフォーチュン
氷川ひかわまりあ／キュアテンダー

妖精

リボン

ぐらさん

協力者

ブルー

相楽さがら誠せいじ司

GO!プリンセスプリキュア

人物

春野はるのはるか／キュアフローラ

海藤かいどうみなみ／キュアマーマイド

天ノ川あまのがわきらら／キュアトウインクル

赤城あかぎトワ（本名 プリンセス・ホープ・デイトライト・トワ）／キュア

スカーレット

妖精

パフ

アロマ

協力者

七瀬ななせゆい

魔法使いプリキュア！

人物

朝日あさひ奈なみらい／キュアミラクル

十六いざよひ夜リコ／キュアマジカル

花はな海みことはく元妖精はーちゃん／キュアフェリーチ

妖精

モフルン／キュアモフルン

協力者

校長先生

水晶さん（キャシー）

リス

ソルシエール

クマタ

キラキラ☆プリキュアアラモード

人物

宇佐美いちか／キュアホイップ

有栖川ひまり／キュアカスタード

立神あおい／キュアジェラート

琴爪ゆかり／キュアマカロン

剣城あきら／キュアシヨコラ

キラ屋シエル＜妖精キラリン＞／キュアパルフ

妖精

ペコリン／キュアペコリン

長老

ピカリオ／キラ屋リオ

協力者

ビブリー

HUGっと！プリキュア

人物

野々はな／キュアエール

薬師^{やくしじ}寺さあや／キュアアンジュ

輝木^{かがぎ}ほまれ／キュアエトワール

愛崎^{あいさき}えみる／キュアマシエリ

ルール・アムール／キュアアムール

妖精

はぐたん

ハリハム・ハリー

協力者

チャラリート

パッパル

ダイカン

ドクタートラウム

スター☆トウインクルプリキュア

人物

星奈^{ほしな}ひかる／キュアスター

羽衣^{はごろも}ララ／キュアミルキー

天宮^{あまみや}えれな／キュアソレイユ

香久^{かぐや}矢まどか／キュアセレーネ

妖精

フワ（本名 スペガサツス・プララン・モフーピット・プリンセウインク）

プルンス

Reunion ～再会の物語～
第0話 プロローグ ～再会の前～

謎の宮殿跡
石書盤
中心部プレート

ここに一つのプレートがあった。太古の昔、かつてこの世界には強大な力で発展した“超古代文明国”が存在していた時代があり、その時代に書かれた物があつた。だが、誰もその超古代文明の存在を信じる者がおらず、その事実を知る者達は少なかつた。

そして、そのプレートにはこう記しるされていた。

この世界に存在する“安和あんわの光”が悪あしき邪よこしまに奪われ光の使者たる伝説の戦士が戦いそれに敗れた時、“暗黒の闇”が統べてを包み、その“混沌の統治”による支配によつて、自由を奪われ人々が絶望するとき、時空を越え、長き眠りより目覚めた“伝説にして究極コアックの超闘戦士”が立ち上がり世界を救う。

10年前の春
夕方

人気が少ない夕方の公園で一人泣いていた女の子がいた。体を縮みこみ目から大粒の涙を流して泣き続けていた。

少女「……………ぐすつ……………ぐすつ……………」

少年「どうしたの？」

そんな少女に話しかける一人の少年がいた。

少年「どうして泣いているの？」

少女「……………みんな……………私を……………ひっくつ……………ぐすつ」

少年「……………大丈夫だよ……………もう泣かなくていいよ……………」

少女「……………な……………なんで……………？」

少年「これからは……………僕が君を守るから。絶対約束するよ。だからもう泣かないで……………」

少女「あなたは……………だれ？……………」

少年は手を出した。後ろの光は大きく輝き出し始めた。

少年「僕？僕の名前は……………」

、

○○○ちゃんを助けたり守ったりする戦士だよ。」

10年後
横浜市住宅街
朝方

?? 「起きろ!○○○!」

?? 「朝になったよ!」

○○○ 「うくん?」パチツ

ふたりのかけ声で一人の少女は目を覚ます。そこは部屋の中、女の子らしくかわいい人形や本棚もある普通の部屋である。部屋の片隅に数々の写真が飾っており、その中で一番気になるのは彼女自身の友達で最近新しく入った彼女達加わった最近の記念集合写真があった。○○○とは別々の学校になるのだがこの写真を見るには60人以上は入っており、最初見えていた彼女の両親達は凄く驚いていた。

○○○ 「ふわく、おはよう。グレル、エンエン。」

グレル 「おはよう。顔洗って来なよ。」

エンエン 「おはよう。」

そこにいたタヌキみたいな姿のぬいぐるみとキツネみたいなぬいぐるみは、○○○を起こしにきた彼女のパートナーの妖精、”グレル”と”エンエン”であった。妖精学校と呼ばれる場所から出てきたこの二人は今では彼女のパートナーとして共に学び暮らしていた。

因みに両親に気付かれないようにしているのだが、最近知られてしま
い今では公認の同居者となっている。

○○○「ふあ〜」

グレル「……………なあ、○○○。何か怖い夢でも見たのか？」

○○○「え？どうして？」

エンエン「寝ながら泣いていたよ。」

○○○「え？そうなの??……………あ……………」ゴシゴシ

エンエンに言われ顔を擦ると涙の後がはつきりとわかった。

グレル「なんか涙を流しながら寝ていたから心配しちまったよ。」

○○○「それで……………」

エンエン「うん……………」

○○○「大丈夫だよ。少し昔のこと思い出したから……………」

グレエン「昔のこと？」

○○○「うん……………私、昔ねいじめられて人気がない小さな公園で
一人泣いていたの、その頃の話は二人に話したでしょ?」

エンエン「それって確か……………」

グレル「前に話してくれた、○○○が小さいときの話しか？」

○○○「うん。あの時、誰かが私に話し掛けてくれて、私嬉しくて
お礼を言いそびれちゃった……………顔はあんまり覚えていない
けどね。」

エンエン「そうなんだ。」

グレル「○○○、無理するなよ。こっちは心配するからよ。」

○○○「……………そ、そんな大袈裟だよ。でも……………ありがとう、気
を付けるから大丈夫。あ、もう支度をしないと私、顔を洗って来る
ね。」

グレエン「うん。（大丈夫かな……………）」

○○○はそう言い部屋をあとにする。

○○○○「なんだろう?..... 夢なのに、懐かしいけど..... なんか、寂しいなあ.....」

心の中で彼女はそう思っていた。その心は少し哀しみが混ざっていた。

彼女こそ、横浜市で暮らしている少女”坂上あゆみ”。彼女は自身自身の強い意志の思いによって誕生した光の戦士、キュアエコーの変身者である。

同時期

横浜市凡高台

?? 「着いた、か.....」

ここに、一人の青年が横浜市の街並みの景色を眺めながら立っていた。その青年の特徴的なのは髪は日本人独特の黒色の髪で世代としては珍しく、後ろに一つのにまとめた日本の武士の髪型ヘアをしていて、青年より大人の男性に近い感じであった。彼は俗に言う美青年イケメンであった。

?? 「ふう……………懐かしいなあ……………やっと故郷ふるさとに帰って来たよ……………もうあれから数十年ぶり、か……………」

青年は首に掛かっているネックレス眺めた。ネックレスには結晶に龍の紋章が付いていて、それは太陽の光に照らされ、美しく輝いていた。

??「フ……いいや……あつち世界ではそうだったがこの世界では10年になるのか……ほんと……ややこしくなってきたな……」

その場を離れ始めた。そう彼はここ横浜市に探しに来たのだ。そして、去り際に青年はある人を思いながら呟いた。

??「……俺は、今日……必ず君を見つけて見せる。俺は、君に会わずにはいられない……たとえば君が俺の事を忘れようともな……」

だから、必ず見つけてみせるよ。

その時まで、待っていてくれよ。

あゆみちゃん……………」

これは青年と少女が再会する数時間前の出来事であった。

青年と彼女との物語が……

A_全
l_て
l
s_の
t_物
o
r_語
i_は
e
s_こ
b_こ
e
g_か
i_ら
n
h_始
e_ま
r_る
e
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

今、
始まる…

第1話 二人の再会

横浜市

横浜中学校

昼休み

ここはあゆみが通う学校、横浜中学校。以前、自身の人見知りであり声をかけられずクラスに馴染めずにいたのだが、今ではそれを解消し、自然と友達を多くなってきた。だが今朝の夢で頭がいつぱいになり少し元気がなくなっていたのであった。

あゆみ「はあ……」

今朝夢で見たものは何なのか？答えは簡単であった。彼女は以前自身の人見知りでいじめられていた。そんな彼女に歩み寄り友達として親しんでいた男の子がひとりいたからだ。あゆみはそんな優しさと心の強さに魅かれ一緒に遊んだり、話をしたりと接していたからだった。しかし、そんな彼が両親と共に行方不明になってしまいあれから10年も経った。原因は未だに不明で何も掴めずにいたのであった。そんな悲しい思いをして、早くも時間がだけが過ぎてしまった。自身の悩みであった人見知りも解消されずに時間ときだけが経っていた。だが、この間で彼女は色々なことを経験していた。憧れていたプリキュア達に出会い、自分も強い意思でプリキュアに変身することができ、妖精のグレルとエンエンがパートナーになり、自身の悩みであった人見知りも解消されて、今では（時々だが）横浜市の町を守っている。そんな生活があつという間に過ぎていき今は友達をつくるほどまで成長をしていた。しかし、それは彼女の記憶から彼との想い出も消えてしまうことになった。

あゆみ「……………」

??「オーイ、あゆみ！」

あゆみ「??あ、絢奈ちゃん……………」

そんなあゆみに話し掛けたのは同級生の香川かがわ 絢奈あやなである。彼女は転校してきたばかりのあゆみに最初に優しく話し掛けたことでは良き友達になっていた。

絢奈「あゆみ、どうしたの？ため息なんて吐いて、何かあったの？」

あゆみ「えっ……………」

絢奈「“えっ”じゃあないでしょ。元気がないよ。」

あゆみ「ううん、そんなことないけど？」

絢奈「いや、何かあったでしょ？嘘ついているのバレバレ。」

あゆみはなんとかごまかそうとするが、同級生友人の絢奈は勘が鋭いのでごまかしができないのであった。観念したあゆみは正直に話し始めた。

あゆみ「……………えっ……………と…………… 絢奈ちゃん……………」

絢奈「?なに?私に言っごらん。」

あゆみ「……………私…………… 夢を見ていたの……………」

絢奈「…………… 夢？」

あゆみ「うん。」

絢奈「ゆ、夢って何か怖いのも出てきたりしたの？」

あゆみ「え?…………… ううん違うよ。そういう怖い夢じゃなくて、昔のこと夢で思い出しちゃって……………」

絢奈「へえ、”夢で昔のことを思い出してた”か。まったくお

かしなことで思い出しわね…… あゆみ……」

あゆみ「うん……」

絢奈「だけど、それにしても元気がないけど…… 何かあった？」

あゆみ「うん…… あの時の事を思い出してね……」

絢奈「え？…… それって確か？」

あゆみ「うん、私がいじめられてた時の…… でも……」

絢奈「でも？」

あゆみ「そんな私を助けてくれた人がいたの。」

絢奈「助けてくれた人？」

あゆみ「うん…… でも、名前は覚えていないけどね。」

絢奈「ふくん。会ったりとかしないの？」

あゆみ「ううん、その人とはその後からは会っていないの…… 私…… その時からお引越しをしてね。それで離ればなれになつて……」

絢奈「へえくなるほどね〜それで元気がないのね。」

あゆみ「うん……」

絢奈「まあ、元気出さなってあゆみ！」

あゆみ「え？」

絢奈「よくあるじゃない、そういう不思議なことはよく新たな恋の出会いの予兆かもしれないじゃない？よくアニメとかドラマとかである運命的な感じの。」

あゆみ「うん…… え？……」

絢奈「……？どうしたの？」

あゆみ「絢奈ちゃん、今なんて？」

絢奈「だーかーらー！そういう不思議な思い出を見る夢はだいたい運命的な恋の出会いになるっていう話!!」

あゆみ「え？…… ええええええええ!!……」

そ…… そそ…… そんな大げさだよ〜絢奈ちゃん…… 顔真っ赤

絢奈「…… フフ…… 冗談よ冗談。(まあ半分だけ……」

ね……半分だけ………」

あゆみ「フー………よかった………あ！」

キーンコーン

安心をしていたあゆみ達すると、学校のチャイムが鳴り始めた。

あゆみ「掃除の時間だよ。絢奈ちゃん、行こう！」

絢奈「えーもう掃除？はあ、行こうか。」

二人は仲良く教室へ向かった。しかし、あゆみの中のモヤモヤは消えなかった。

あゆみ「………また………会ってみたい
な………」

あゆみはそう呟きながら思った。

放課後
通学路

学校が終わり家に帰っていたあゆみ。しかし思わぬ事態が発生する。それは……………

あゆみ「あれ？ここ工事している……………」

警備員「ごめんね。今緊急の水道工事をしていて、通行止めになっているんだ。申し訳ないけど向こうの迂回路から反対側に回ってください。」

あゆみ「…………… はい。分かりました。」

警備員「気をつけてね。」

あゆみ「ありがとうございます……………」

いつも通っていた道が緊急の工事のために通れなくなっていたのだ。仕方なく彼女は普段は通らない、道を通ることになった。

彼女が迂回路に行ってから、今度は別の人物が警備員の前にあらわれた。

?? 「あのくすみません」

警備員 「はい！何でしょうか？」

?? 「向こうに行きたいのですが、迂回路はどちらになりますか？」

路地裏

あゆみ「……………」早く帰ろう。」

人氣が全然ない通り道、辺りにはほとんど閉められたお店、スプレーの落書きで埋め尽くされているシャッターと古びた店が多い通りで日差しも少なくまさにそこは廃墟の都市ゴーストタウンと呼ばれる場所になっていた。そんな場所をあゆみは一人歩いてきた。この道は、人々があまり通らない事から柄の悪い連中や不良達が集まる有名な場所ここで被害に遭うこともしばしばあるらしくめったに通ることはないのであった。普段の道は彼女一人でも問題はなかった。そのため、彼女の変身アイテムはいつも家に置いてきていたのであった。しかし、あゆみの自宅はこの先の通りであり、ここを通過しない限り帰れないのであった。あゆみは、雰囲気や印象は『美少女』に分類する為、女の敵に遭遇することがごくまれにあった。普段は同級生の友達（又はオールスターズ）との団体行動が多いためそのようなことは起きず、また起きたとしても追いついてもらっている。しかし、ここは普段の人々を通らない『ゴーストタウン』、そこにいるのはとても危険な場所にはかわりはない。現にあゆみ自身も不安でしかない。何も起

きないことを祈りつつ帰宅していた。

あゆみ「(皆やお母さんから言われて通っていなかっただけどころなに怖い通りだったなんて……………」」スタスタ

??「おい!そこのお前!!」

あゆみ「っ!!」

??「何だ、テメエ。何俺らにガン飛ばしたり、周りをキョロキョロとしているんだよ……………なんか文句でもあるのか?あ”あ”!!」

普通に歩いていただけのはずが、道の影から不良が出てきた。

あゆみ「い、いえ、私は、な、なんでも……………」

不良「はあ?声が小さくて聞こえねーな。」ニイー

不良は、わざとらしく聞こえないふりをしてあゆみに近づいて来た。その時不良の顔が不適に笑っていた。何か怖い、そう悟ったあゆみはその場から逃げようとした。しかし…………

不良B「おいおい、どこに行くんだ。」

あゆみ「っ!!」

不良C「逃げんじゃねーよ。」

不良D「へへ……………」

後ろから別の不良が三人現れた。前と後ろに不良が立ち塞がり、挟み撃ちにされていた。

不良D「おい。何逃げようとしているんだよ。」

あゆみ「い、いえ。ただ私は帰っていただけです……………」

不良A「はあ?キョロキョロ周り見ながら、俺らに面を飛ばしているか?ただですむとでも思っているかよ?」

あゆみ「い、いえ、そういう事は……………」

不良A「あ”あ!!俺たちに喧嘩売って、すぐに帰れるとも思ったか!!オラ!!」グイ!

あゆみ「きやつ!!」ドン!!

不良Aはあゆみに苛立ち、彼女を押し壁に当たった。あゆみは痛みを耐え相手の振り向いた。不良達は壁側に迫りあゆみを睨み付け逃がさないようにしていた。

あゆみ「っ………… や、やめてください。私は帰っていただけです…………」

不良B「へ!俺らがそんなことだけで納得ができると思っているのかよ!」

あゆみ「そ、そんな……………」

不良D「へへ、まあ俺らは鬼じゃねーから大目に見てやってもいいけど、その代わりに言うことを何でも聞いて貰うけど……………」

あゆみ「や、やめてください…………… そ、そんなの困ります。」

不良C「残念だなあ、俺らがただで帰らせて済むとも思ってたか。グイ!

あゆみ「キャツ!!」

不良はあゆみの腕を掴み出して、逃がさないように力強く握り、壁に押し付けた。男の握力と腕力のためあゆみは痛みだし始める。

あゆみ「いたっ………… い…………… お…………… お願い…………… します…………… 離してください……………」

不良A「へへ、誰が離すかよ。大人しく言うこと聞いて貰うぜ。へ……………」

あゆみ「い、いや…………… いや!…………… だっ誰か!たs」

不良D「おっと、させねーぞ。」グツ

あゆみ「ン!」ムグツ

不良C 「大人しく聞けよ！こいつ!!」グイ！
あゆみ 「んー！んうー!!」モゴモゴ

あゆみは不良達に取り押さえられ、身動きがとれなくなってしまう。あゆみの目から涙を流し、ただただ、不良達からの恐怖をひたすら見つめることしかできなかった。

あゆみ 「……………お願い。誰か、誰かたすけて
!!……………!!」

あゆみは心からそう呟いた。ただ希望を信じて……………

?? 「おい。ちよつといいか？」

不良達 「あ” あ” !!」

あゆみ 「んんう??」

声が聞こえた。優しいかけ声で、誰かがあゆみと不良達に声をかけた。声がした方に振り向いたら一人、あゆみ達に向かって歩いていく人影がいた。見た瞬間、その人がすぐに男だと気づき、あゆみは見つめ続けていた。その人物は身長はあゆみよりでかく、体は少しガタイ感で、顔つきがとても整っており、歳も自分より歳上に見え、服装は全体的に黒と金色が混ざっており、大きめの(軍用?みたいな)ブーツ、髪型は後頭部に1つにまとめたサムライヘアーにボサボサ感が混じっている仕様、青年というよりかは美青年という言葉が似合う人物だった。

青年 「お取り込み中申し訳ないけど……………」

不良A「なんだてめえ。」

不良D「おう！何もンだよ。おめえ。」

青年「うん？いやいや、ごめんだけど、俺、あんたらに聞いているんじゃないだよ。」スタスタ

不良達「はあ？」

青年「あんたらじゃなくて、そっち君に聞いているんだよね。数年間、いや10年間の武者修行の旅から久々の故郷日本に帰って来て幼い時に別れていた友達に会いに来ただけど道に迷ってね。ちよつと詳しくそんな感じの子がいたから良ければ教えてほしくて……」スタスタ

青年は歩きながらあゆみに話しかけて来た。それに腹を立てたのか不良達が……

不良C「はあ!!なに見てンだよ。オラ！こっちの状況分かっているのかよ!!今こいつと取り込み中じゃあ。このボケが!!!」

不良D「てめえは黙ってこっちの質問に答えろや！ゴラ！クズが!!そこでポケットと突っ立てるんじゃないやねーよ。」ゲシ！

あゆみ「ンンウー！」ズキッ

不良Dの足があゆみの右足を踏みつけた。あゆみは痛んだ。しかし、自分は口を塞がれ声が出せれないでいた。

あゆみ「……………痛い……………お願い……………たすけて……………」ポロツ

あゆみは涙を流し、今はとにかく痛くてしようがなかった。すると、それを見ていた青年の目付きが変わった。

青年「……………おい。」スタスタ

不良A「ああ!!なんだよ。さつきからよ!」

青年「……………最初、俺もてめえらに気づかなくて申し訳なかった。それはコツチが悪かったし、謝るよ。でも、今、俺の目の前の人
が傷付いていると黙って目を瞑っているわけにはいけねえんだよ。目を瞑って見て見ぬふりをするほど俺も人間出来ちやいねー
んだよ。」

不良D「はあ?てめえ、さつきから何が言いてえんだよ。このクズ
野郎が!急に態度を変えやがっていったい何がしてーんだよ。」

青年「……………なんなら、単刀直入に言うけど。その子を離せよ。
彼女、物凄く痛がっているし、怖がっているんだろうが。」

不良A「は?おめえ何言っているんだよ。こいつは俺らに用がある
んだよ。邪魔するとぶん殴るぞゴラ!!」

青年「……………もう一度だけ言うぞ、その子を放せ……………」

不良B「は!聞こえねーよ。ケガしたくねーならとつとどここから
消えやがれて言うんだよ。下ろすぞてめえ!!!」

青年「はあ…………… あっそ…………… だったら別に潰すなり下ろすなり好きにすればいいだろうが。でもな、俺って見た目こう見えても、中身は結構強いんだぜ。そのためえらよりかは遥かにな。」ニヤツ

不良A「笑ってるんじゃねーぞゴラ!!」

不良D「いきなり出てきて偉そうにするんじゃねーぞゴラ!!」

不良C「だったら来て来いや!!口だけで言ってるんじゃねーぞ!!」

青年「あっそ、いいよ。だったら…………… 今……………」

『彼女を助ける』それだけだ…………… 「シヤツ！」

青年が吐いた同時、あゆみと不良達の目の前で彼は一瞬にして姿を消した。

不良達「は?!」
あゆみ「え？」

彼が消えたそのあと、そよ風が吹き出してその場にはしばらく沈黙だけが残った。

不良A「チイツ！なんなんだよ。さっぱりわかんねえよ！」

不良B「ああ！………て！お、おい！あの女いねえぞ！」

不良A「は？何言ってる………なっ!!」

気が付くと不良達はいつも間にか女あゆみではなく壁を押しえていただけになっていた。

不良C「おい！何でいねーんだよ!!お前口を押しえていただろうが!!なに逃がしてんだよ！」

不良D「知るかよ!!おめえだって腕つかんでいただろうが!!そっちがちゃんとかんでいなかっただけだろうが！」

不良A「くそが！どうなってやがる!!!」

不良B「あいつらどこに行きやがった?！」

不良達が困惑していた、さつきまで怯えていた女が自分たちが捕まえていた感覚も残ったまま急に消えてしまったのだからだ。だが、そ

んな沈黙をすぐに消えてしまう。

青年「あくそれは、この人の事かな？」

不良達「なっ!!」

声が出た方に振り向くとそこにはなんと、消えていたはずのあゆみが青年に抱えられていた。横抱き抱えた状態、俗にいう『お姫様抱っこ』である。

不良達「な、何でその女がそこにいる／いやがる!!!」

青年「おいおい…… お前ら耳悪いな。さっきも言っただろうが。俺は『彼女を助ける』とね。ま、あんたらの耳じゃあ、聞こえないからしょうがないか……」

不良達「あ”あ!!」

あゆみ「え?…… あれ?私……」

青年「大丈夫か??」

あゆみ「え?」

あゆみは自分が助けられたと気付いた。青年の顔を見たあゆみはとても凛々しくかつこよく見えた。彼女もれっきとした年頃の女の子、こんな顔が整っている美青年に抱き抱えて(お姫様抱っこ)もらっている(しかも顔が近い)。あゆみの年代の女の子ならこんなシチュエーションは誰でも憧れたりするのだ。

そのため……………

あゆみ「…………… えっ…………… えええええええ?!」ボン!

青年「よう……………」

あゆみ「えええ、えええつとそ、その、あああの?!(わ、私どうなっているの?!えつと、確かあの時に怖い人たちに囲まれて怖くて動けなくなつて、そしたら急に男の人が現れて、歩いて来てたら突然男の人が消えてしまつて、気が付いたらその男の人に、お、おおおお姫様抱っこされて…………… それから…………… 私いつたどうなっているの!!!)」カー

あゆみの頭の中は羞恥心がこみ上げ、パニック状態になっていた。そのため彼女の顔が真っ赤になっていた。

青年「あ…………… その取り敢えず、一旦落ち着いて、ね?まあ当然びっくりしたよな。」

あゆみ「は、はい…………… あの、えつと。わたし、いい、いつたいどうして?……………」ポー

青年「何、俺が君を助けただけだよ…………… 走つてな。」

あゆみ「は、走つて…………… ?」

青年「そうそう、まあ、今はそんなのどうでもいいや。それより君、

怪我は??何処か痛む所はないか?」

あゆみ「ふえ?あ。私の……」

あゆみは自分の右足を見た。

青年「こっちの右足が痛む?」

あゆみ「ええええと、ちよつとだけです……あの……えつと……その……な……な、なのでそろそろ、下ろしてもらっても、いい、でしょうか?」

青年「全然大丈夫じゃないなこの子……彼女、我慢しているし。バレバレだし……それに……ん?あ……いや、ちよつとそれは出来ないな……」

あゆみ「え?!な、何ですか??」ドキッ

青年「イヤーあっち側がな……俺達をそう簡単には帰らせるつもりはないらしい。……」クイツ

あゆみ「あっち側……」チラッ

青年が振り向いた方にあゆみも振り向くとそこには……

不良A「おい!テメエら!待ちやがれや!!このくそたれつが!」ダダ!!

不良B「どういうわけで俺らから逃げられたが知らねーが!!いい気に乗るんじゃねー!」ダダダ!!

不良C「このまま、逃がすかよ!!!」ダダダ!!

不良D「俺らから逃げきれるとも思ってたんじゃねーぞゴオルラ

!!」ダダダ

さつき自分を捕まえていた不良達が逃がさんとばかりに走って追
い掛けて来たのであった。

青年「これはちよつと不味いな……………」

あゆみ「っ!!」ビクッ

青年「(やつばまだ怖いんだな。まあ当然と、いえば当然だよな。そ
れにその足じゃ、しばらく走って一緒に逃げれそうじゃないし
な……………) …… 悪い、ちよつと走るぞ。」ダダダ!!

あゆみ「え!ひやあー!!」ギョッ!

青年はあゆみを抱えながら走り出した。

あゆみ「(え?え?!何これ?!ナニコレ!ナニコレ!!わ、私、お、男の
人に抱き抱えたまま、は、はは、走っている!!)… … あっあの、あな
たは?…………)」

青年「俺か?俺は弱気者を助ける通りすがりでただの戦士だよ。」ダ
ダダ!!

あゆみ「せ、戦士?………… (………… あれ?どこかで聞いたことあるよ
うな??)」

青年「ああ………… そういえば君、この辺りの地域で、知っているかな
?服装から見れば近くの中学校の生徒みたいだからさ?もし、知って
いれば道を教えて欲しいのだけど。いきたい場所があるんだ。」ダダ
ダ

あゆみ「え。ええと………… その………… ごめんなさい。私もあまり
この道は通らないから詳しくは…………)」

青年「え?ああくもしかしてあんまりこの道通らない感じかな?」
ダダダ!!

あゆみ「は、はい…… すいません。普段は別の通学路を使っているんで……」

青年「別の通学路？ああくなるほど、だいたい読めたよ。しかし…… 全くひどい話だよな。君を痛め付けるなんてな。」ダダダ!!

あゆみ「…… ごめんなさい。」

青年「？」ダダダ!!

あゆみ「私のせいで…… ご迷惑を……」

青年「ああくそんなこと??別に気にしないでくれ…… 悪いのは君ではなく後ろの連中だからさ。それに……」ダダダ!!

あゆみ「そ、それに？」

青年「ここを通過しなければ君に出会うことはなかったかも知れないし、気にしないでくれ。」ダダダ!!

あゆみ「す…… すいません。」

青年「フフ…… あ、そういえば君、名前は？」ダダダ!!

あゆみ「え？」

青年「君の名前。」ダダダ!!

あゆみ「わ、私。あゆみ。坂上あゆみです。」

青年「っ!!な、君が……」ダダダ!!

あゆみ「は、はい!ええと、あ、あのくでできれば、あなたのお名前は……」

青年「え?俺か。俺は…… っ!!周り込まれたか……」ダダダ!!

あゆみ「へ?あっ!」

反対方向を見るとまた別の不良達が現れた。どうやら、後ろの不良の誰かが別の連中を呼び、走りながらこちらに向かっていた。挟み撃ちされていたのだった。

別の不良達「オオオ!!」ダダダ!!

不良A「へへへ!てめえら、そこで堪忍しやがれ!!」ダダダ!!

青年「フフ、そんなんで俺たちを捕まえるとも思っていたのかよ。」ダダダ!!

青年はあゆみを抱えながら狭い路地裏に入った。

不良A「馬鹿か!!(こっちは行き止まり!逃げ道なんてねえーよ!!)

オラ!お前ら畳み掛けるぞ!」ダダダ!!

不良達「待ちやがれ!!!」ダダダ!!

不良達は知っていたその道が行き止まりになっていることを、不良達は畳み掛けるために全員一斉に押し入って行った。

青年「ふーん……全員一斉に入ってきたか……懲りもしないな

あの不良達……」ダダダ!!

あゆみ「……あ!!前が行き止まりに!!」

青年「ん?……なるほどね。そういう事か。」ダダダ!!

あゆみと青年の前方に大きな壁があった。高さは三メートル位あ

り、行き止まりになっていた。

あゆみ「ど、どうすれば!!!」

青年「………… フフ…………… なんとかなるか。」ダダダ!!

あゆみ「え?」

青年「確かに前は行き止まりで向不良側にとつては好都合だろうな。このまま行けば俺たち二人はあの不良達に捕まってしまうだろうなあ。」ダダダ!!

あゆみ「あの………… お願いします………… 私を………… 下ろしてください……………」

青年「?なぜ?」ダダダ!!

あゆみ「………… それは………… あ………… あなたを巻き込ませた………… から………… それ………… そんなの私は嫌なんです………… だから……………」

青年「………… フフフ………… なるほど、『責任』か………… よほど勇気があるようだな君は…………」ダダダ!!

あゆみ「………… はい……………」

青年「………… 悪いが………… それはできないね。」ダダダ!!

あゆみ「え!!」

青年「さつき、『俺の目の前で人が傷つくところを目を瞑って見過ごす事はできねえ』って言ったろう?」ダダダ!!

あゆみ「そうです………… けど……………」

青年「………… 後、それだけじゃない。」ダダダ!!

あゆみ「?」

青年「俺は約束したよ。『助けると』と、しかも、二度もな。」ニコ

あゆみ「………… え?二度…………?」

青年「ああ…………」ダダダ!!

青年は、走る勢いを止めずそのまま壁に向かって走り続けた。このままだと、壁にぶつかってしまう。

不良A 「往生せいや〜!!」 ドドドド!!

あゆみ 「っ!!あ、あの!!…」

青年 「。案の定あの壁にぶつかると??」

あゆみ 「え!えと、… ええと、その。」

青年 「フフフ、大丈夫… よし!!しっかり捕まってくれ、

飛ぶぞ!!」 ダダダ!!

あゆみ「え!!」

青年「フ!!」ジャンプ!!

あゆみ「え? キヤア!!」ギユツ!

不良達「は?!」ギョツ!

不良達は驚いた、青年は横に置いてある置物やクーラーの室外機を足場にして、ジャンプしていき、壁を登り始めたのだ。

青年「ほっ、とっ、よっ、はっ!」トン…トン…トン…トン…トン!!

そして、二人は壁の真上に到達し振り向いて……

青年「よし!!できた。」シユタ!

あゆみ「……ええ?!」

壁の上まで登りきった。青年は後ろの不良達を見下ろして……

不良達「……なっ……」ボーゼン

青年「ふー……さあーと……ここからなら……いい
な……それでは、諸君……

じやあな！……」バツ！

青年はいい放ち、あゆみを抱えながらそのまま壁の反対側に飛んで行った。不良達は当然、啞然としたまま立ち尽くし……

不良A「な……」

不良達「何イイイイイイイ！！！！」

絶叫混じった声をあげたのであった。

あゆみ「え？え？ええええええ!!!」ヒューン
青年「よいつしよつと!!」ダン!

一方、不良達をまいた二人は反対側に着地した。

青年「よし!!これなら追ってもこれないだろう。」

あゆみ「……」ボーゼン

青年「…… どうした？」

あゆみ「えと、私…… 助かった、の??」

青年「え？ああ、助かったよ。この高さからはやつらも上がるのは困難だろう、反対側に回り込まないとこれないし、けど、また来るかも知れないし用心はしないといけないな。まあこのまま路地裏を出て安全な広場まで行こう。」

あゆみ「…… はい……」

青年「おい…… 大丈夫か？足以外に他の所も痛むところはあるか？」

あゆみ「…… いえ、あり、ません…… っ!!……」ガクガク

青年「……」

あゆみ「…… (怖かった。スゴく、怖かった…… もしあのまま
だったら…… わたし……)」ポロポロ

あゆみは、先ほどのことを思い出し震えだしてきた。

青年「……無理するな……」
あゆみ「だ、大丈夫……です。」
青年「……ちよつといいか？」グイ
あゆみ「??……あ……」

青年はあゆみを抱き寄せ頭を撫でた。

青年「……もう、大丈夫。怖かったな、一旦君が落ち着いてから
安全な場所に行こう。もう、

ここにはあいつらはいないよ。」ポンポン

あゆみ「グス……ごめ、んナ、さい……ワたシ……」ポロポロ
青年「いいさ。大丈夫……」
あゆみ「うわぁーん!!」

あゆみは、泣いた。こらえていた感情が溢れだし耐えられず泣き続けた。その間、青年は彼女に寄り添い、落ち着かせるまでずっと抱きしめ、頭を撫で続けていた。

時は経ち、数十分後……

あゆみは落ち着き、話せる状態に戻り、幸いにも反対側は彼女も知っている道だったため安全な場所に向かうことになった。しかし、

それと同時に、また……

あゆみ「……………（私、は、恥ずかしい?!?!）」「カー—！」

青年「オーイ……………大丈夫……………か？」

あゆみ「（私、すごいことをしちゃった……………）だ、大丈夫です。大丈夫、です、けど、その……………あの、えっと、そろそろ……………」「カー—！」

青年「……………まだダメだ……………足を痛めているじゃないか、その状態で帰りつくかわからんのに、君を放つては置けないよ。」
あゆみ「……………は……………はい……………（う、嬉しいけど。こ、こんなところだれかに見られたら、絶対弄られる……………）」

あゆみは再び羞恥心にみまわれた。無理もなかった。自分はまだ青年に抱き抱え、道を教えながら安全な場所に向かっていた。

あゆみ「……………（……………でも……………この人、どこかで……………）」「ジー

青年「……………なあ、さつき言っていた公園は見えてきたあれか？」

あゆみ「え？あ！はい！そうです。」

青年「そうか……………」

あゆみ「……………えっと。そ、その。す、すみません。あのくわたし、重くはなk」

青年「はい！ストップ!!……………おいおい。女の子がそういう事は言わない。大丈夫だよ。男はこれぐらいしないな。」「ニコツ

あゆみ「は、はい……………」「ポー

青年「フフ……………とりあえず、こっちに座ろう。」

青年はあゆみをベンチに座らせ、あゆみの前に出て腰を下げ、見ていた。

あゆみ「……………っ!!(か、カッコいい……………)」ポ

青年「さあ、右足を出してくれ。傷を見る。」

あゆみ「……………!は、はい!」スツ

あゆみは右足を青年に上げ見せた。右足は、少し腫れて青アザになっていた。不良が踏んだ跡が痛々しく見えた。

青年「……………ひどいことを……………これじゃ、まともに立って歩くことが困難だ。少し水で冷やそう。」

あゆみ「はい……………あ、あの!!」

青年「??」

あゆみ「えっと、その、さ、さつきは助けてもらいありがとうございます。ありがとうございました!わたし、なんとお礼をすれば……………」ペコ

青年「ん?フフ、気にするな。別にお礼はいいよ。」

あゆみ「そ、そんな……………」シユン

青年「……………まあ、その、そこまで言うのだったら、その一様

メモに住所と場所が書いてあるから……教えてくれないか？」

あゆみ「？場所ですか？」ペア

青年「あー、うん、一樣その友人の親さんには連絡をしたんだけど、この地域は初めてだから道を迷ってね。（この子、感情表現わかりやすい。）」

あゆみ「そのメモを見せてもらってもいいですか？」

青年「うん、けど……」

あゆみ「な……なんですか？」

青年「多分驚くと思うよ。」

あゆみ「え？」

青年「フフ……ほい。」ッメモ

あゆみ「??……え！」ギョツ!!

^{住所}青年から渡されたメモを見てあゆみは驚いた。青年から渡されたメモにはなんと……

あゆみ「わ……私の家の住所!!どうしてあなたが?!」

それは、自分の住所だった。あゆみは困惑した、どうしてこんな

美青年イケメンが自分の家に向かうのか、気になってしまおうのであった。

青年「……………その様子だと、俺のことを覚えていないみたいだな。無理もないか。」

あゆみ「お、覚えていない??…あ、あなたはいつたい何者なんですか?」

青年「俺か?俺は、今から10年ほど前に突然行方不明になって、消えた男だよ。」

あゆみ「10年前……………」

青年「……………最後に会ったのはそうだな……………君が泣いていた公園で、『君を守る戦士になる』と誓った次の日に俺は自分の両親と共に古代遺跡の発掘のために向かったまま行方不明になっていったんだ。」

あゆみ「10年前……………戦士……………公園……………」

その言葉にあゆみの脳裏に、何かが引っ掛かった。

?? 『君を守る戦士になる。』

そして、彼女は思った。今朝見た夢と10年前の出来事が重なった。

あゆみ「っ!..... ま、まさか.....」

青年「ああ。前に君に会い、俺達は遊んだり話したりした仲だぜ。」

あゆみ「..... あのとき..... 私に話しかけた人.....」

青年「そう、ある日君は虐められどこか行ってしまった。大人達が探していた時、あのとき俺は公園で泣いていた君を見つけてた男さ。」

あゆみ「どうして、私に?」

青年「ただただ..... 放っておけなかっただけさ..... 一人にしかくはなかっただけさ。」

あゆみ「..... 私..... 何で.....」

青年「そりゃ、会ったのは10年前で君と出会って1ヶ月位しか、話したり遊んだりしかしてないからな。」

あゆみ「..... そうなんだ。」

青年「俺は、君に何も言わないまま消えてしまった。あのときはガキだったから、また会う日に話そうと思っていた。しかし、俺は突然事故に合いそのまま行方不明になって、10年も月日が過ぎてしまった。」

あゆみ「.....」

青年「俺は、今日その住所をようやく見つけて、君に会うためにこ

の横浜市に来たんだ。まさか、こんな再会になるとはおもわなかったけどね。」

あゆみ「……………ごめん、なさい……………」ポロ

青年「ん？」

青年はあゆみに振り向くと泣きながら青年に頭を下げ、謝罪をし始めた。

青年「!!どうした？」

あゆみ「私……………こんな……………優しい人……………を……………忘れていたなんて……………」

青年「……………」

あゆみ「本当に……………ごめんなさい……………ごめん……………なさい」

青年「……………もう泣かないで、あゆみ……………」

あゆみ「へ？」

青年「……………もう泣かないでいいんだ、俺のほうこそ仕方がないとは言えど、君を一人にしてしまった。」

あゆみ「……………」

青年「だから、その……………こういう事はなんて言ったら言いかわからないが、ここから……………またもう一度、初めよう。」

あゆみ「……………ありがとうございます……………ごぎいます……………」

青年「フフフ、どうやら落ち着きを取り戻してきたな。よかった。」

あゆみ「……………あの……………」

青年「ん？」

あゆみ「……………その……………」
青年「ああくそうだった名乗ってなかったな。ドタバタで言いそびれちゃったからな。」

あゆみ「……………ごめん……………ね」

青年「しょうがないさ、またこうして再会ができたんだ。こういう

のも悪くはない。」

青年は、凛々しい顔に変わり、あゆみに見つめた。

青年「改めて、自己紹介を、

俺の名は、

藤原龍星

坂上あゆみ。否、あゆみちゃん。おひさしぶりとただいま!!これから、またよろしく頼む!!」ニ!

龍星は、あゆみに言い手を差し出した。

あゆみ「えつと… お、おかえりなさい。… それ、と… こちらもよろしく願います。…」

あゆみは龍星の手をつかみ、握手をした。

これが、10年振りとなる二人の再会の瞬間であった。

t
o
す b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.< .
.< .

第2話 公園での会話と挨拶訪問

幻のプリキュア、“キュアエコー”に変身する少女”坂上あゆみ”は不良に襲われていたところを謎の青年に救われていた。青年はこの地域にいる友人を会いに来ていたところ、道に迷ったらしくそこに偶然、不良達に絡まれていた彼女^{あゆみ}を助け出し、何とか逃げ切ることができた。あゆみはお礼として道を教えることを約束し、青年が持っているメモを見せてもらうことになった。しかし、そこに書いていたのは彼女自身の家であった。気になったあゆみは青年に自身の家の住所だと言い、青年に『あなたは何者なのか?』と聞くと青年は『10年前に行方不明になった者』^{ふじわりゆうせい}と言い、また自身を“藤原龍星”と名乗った。

これは、10年ぶりに再会した青年と少女の物語である。

夕方

兼公園

あゆみは不良達の横暴によって足を負傷してしまい、歩けずにいる為、青年の龍星とともに公園で足の手当てをしてもらうことになった。今、彼らは手当てを終わらせて、公園のベンチに座っており話などをしていた。

龍星「しかし、まさかあの場であゆみちゃん君に再会することになるとは思わなかった。」

あゆみ「私も、まさかあの時に『約束した人』に会えるとは思わなかった。」

龍星「本当にな。こんな偶然があるんだなんて……世の中って、わからないものだなあ……」

あゆみ「う、うん……」右足を見る

自身の右足を見るとまだ青アザがあった。しかし、龍星の手当てで、痛みは減って来たのであった。だが、まだ歩くには困難であるため動けずにいた。そのため、龍星から『抱っこして送って行くのか?』と言われていたのだが、彼女は『ご迷惑をかけたくない。』と、顔を赤くしながら言い、またしばらく待つことにしていた。

龍星「……………痛みは減った?大丈夫?」

あゆみ「…え!う、うん……………」

龍星「…そうか……………それは、よかった……………」

あゆみ「…あ、ありがとう……………あなたのお陰で……………その、だ

いぶ痛みが減ってきました……」

龍星「それはよかった…… フフフ」ニコツ

あゆみ「…… あ…… ふふふ……」ニコツ

あゆみは、龍星につられて笑った。彼女自身からすれば初めてに近い感じに思たはずなのだが、なぜか自然と笑っていた。

龍星「……… 笑った。」

あゆみ「え？」

龍星「あ、いや、久々に『笑ったなー。』て、そう思ってただけさ…… それにしても……」

あゆみ「な、なんですか??」

龍星「その、なんと言えはいいかな??……… 久しぶりに会えたからなのかな??前よりもさらに綺麗美人になったなーて、思っただけさ。」

あゆみ「……… え?……… ええええつ!!そ!そそ

そそ、そんな!いえ!あの、そ、そそんな事!!えつと、あの!うううー(な、なんか…… 照れちゃう!は、恥ずかしい)「カー

龍星「あー、悪い。別に茶化すつもりはなかったんだが……… 気を悪くしたか?」

あゆみ「え!!あ、いえ!えつと、そのく」

龍星「フフフ…… 美しくなったただけではなく、前よりもさらに可愛いなあ……」

あゆみ「えええ!!そ!そそそんなこと!!!」

龍星「お、おう?!そんな驚かなくても……… ま、まあ、取り敢えず今はもう少しだけ休んで待とう。まだその足の状態じゃ、歩行は困難だろうからな。」

あゆみ「つ!!!……… は……… はい……… (わ、わわわ私。は、初めて男の人にか、かか『可愛い』って言われた!!!えええつと。こんなとき

は、ど、どうすればいいの!?)「真っ赤つか

彼女は、恥ずかしい思いがいっぱいで困惑と顔を真っ赤にしていた。まさか自分がこんな美青年イケメンにお姫様抱っこをさせられ、さらには不良達に絡まれてた所を助けてもらえ、さらには自身を『可愛い』と言われるとは思ひもしなかったのであった。

あゆみ「……………(ど、どうしよう。私……………まだ心がドキドキして
て止まらない……………)」「顔真っ赤

龍星「なあ……………」

あゆみ「ひやつ!ひゃい!(か、噛んだ……………)」

龍星「(ありや、舌を噛んだみたいけど……………本当、あゆみちゃんこの子可愛く
なったなあ……………)えっと……………そのいきなり、こういうこと質問する
のは悪いが、あゆみちゃんてさ、ああいう奴らに絡まれられる事って、
何回かあるのか?」

あゆみ「え?!あ!えっと、その……………ナンパされるのはそんなには
ないですけど……………さっきみたいなのは……………その……………は、初め
て……………です……………」

龍星「……………そうなのか……………うーん。」

あゆみ「ど、どうかしました?」

龍星「ん?んーちよつと考え事さ……………うーん……………」

あゆみ「??(どうしたのかな?)」

龍星「……………よし!」スクツ

あゆみ「え?」

龍星は何かを思いつき、立ち上がった。そのまま彼女の前に向い
た。

龍星「あゆみちゃん、やっぱり俺が抱っこして送っていくよ。つか、そ

の方が絶対早くていい気がする。」

あゆみ「え?.....えええっ!!」ギョツ!

龍星「どうせ、俺が挨拶に向かう場所も君あゆみちゃんが帰る場所もいつしよだし、ここで待っているよりも家で手当てして安静にしたほうが早いから、その方が絶対にいいのかも知れないよ.....それによく考えてみればそっちのほうが断然治りも早いと思うけど.....」
あゆみ「えええええ!!そ、そそそそんな!えっと!その!あの!.....(まさか、またさっきのお姫様抱っこをするの!!)」アタフタ

龍星の申し出にあたふたと動き出すあゆみ。彼女はこのような事に関してはまだ耐性がないので一番困惑をしていた。

龍星「はあく(.....ああくこりや、重症だなあく).....えくと.....あのさ、あゆみちゃん.....取り敢えずは.....一旦落ち着いて.....な、と!」グイ!
あゆみ「っ!!」ボン!

龍星はあゆみを落ち着かせるため、前に出て両手を頬に当てそのまま自分のおでことあゆみのおでこを当ててじっと見つめはじめた。

龍星「.....」ジィ〜

あゆみ「っ!!っ!!!(近い!近い!!近い!!か、顔が!!顔が近い〜〜!!!私、こんな事されたことないの!〜!!!)」ピィ〜!

当然そのような事に関して耐久力が全くないあゆみは顔か真っ赤に染まり、固まってしまう。そして、なぜか頭から湯気が出てきてしまう。

あゆみ「.....!!!(し、しししかも!こ、こここんな、こっここここここ恋人みたいに!!!う、嬉しいけど!本当に、嬉しいけど!!顔が近

すぎる!!)」真っ赤

龍星「……落ち着いたか? あゆみちゃん??」パツ

龍星は話しかけ、顔を遠ざけた。

あゆみ「だ、大丈夫でしゅ! お、おおお落ち着き、ました。」真っ赤
龍星「本当か? 顔が真っ赤になっているんだが??……もしかして
風邪をひいたか?!」

あゆみ「い、いいえ! いいえ! いいえ! だ、だ大丈夫です!!」真っ赤

龍星「………んんん? 全然そういう風には見えないけどな。
まあ、その……あまり無理はしないでくれ……な?」ニイ!
あゆみ「つ!! は、はいつ!! (も、もう!! な、ななんでもこの人は、
そんなカツコいい言葉こを平然とそのままできるのく!!)」真っ赤

あゆみは顔を真っ赤に染めて、心からそう思っていた。

龍星「……まじで、このままだと遅くなってしまふけどな……」
あゆみ「えつと、その。も、門限とかそういう時間までに帰らない
といけないこと、とかはないです……だ、だから……そ
の………本当に……えつと……」真っ赤
龍星「……しかしなく………ん??」

龍星は何かに気づき、立ち上がった。向いている方向には先ほど龍
星とあゆみが通った道を見続けた。真剣な顔色になりあゆみに近づ
いた。

あゆみ「??どうしたの?」

龍星「……えつと……あゆみちゃん……」

あゆみ「はい?」

龍星「ごめん、だけど今すぐここから離れよう。」

あゆみ「え?..... どうして?」

龍星「..... さつきの連中不良がこっちの方に来ている。」

あゆみ「え!!」

あゆみは龍星が向いている方向を見た。ここからはまだ遠くに
いるためか、龍星自分達には気付いてはいなかった。だがあきらかに自分達
のいるこの公園場所に向かっていている影が数名ほどいた。

龍星「あいつら不良達、意外に根性があるみたいだな。」

あゆみ「そんな.....」

龍星「..... あゆみちゃん。俺が抱っこして.....」

あゆみ「っ!!だ、大丈夫..... 痛っ!!キャツ!」グラツ!

龍星「おっと!」バツ!

あゆみは無理やり立とうとしていたが、足が痛みだし転びかけた。
龍星はとっさにあゆみの手を掴み体を抱きよせ、支えた。

あゆみ「い、た。」

龍星「おお、セーフ..... あゆみちゃん..... さつき無理はする
なといったのに.....」

あゆみ「っ!す、すみません。」

龍星「ふー、10年も見ない間に無茶をするもんだ..... それより
もここにいるのは時間の問題だな..... あゆみちゃん。」

あゆみ「は、はい」

龍星「唐突で悪いが君の家までの道を教えてくれる??俺が抱っこし
てやるから落ち着いてな?」

あゆみ「う、うう..... そんな..... (どうしよう。いい人だけ
ど..... また大通りを行くなんて..... やっぱり恥ずかしいよ.....
!!)」

龍星「(うわ~この子、顔真っ赤だ..... できれば、早めに決めて
ほしいけど.....)」

あゆみは選択を迫られていた。確かに龍星の言う通り彼に抱お姫様抱っこえながら送ってもらったほうが早いとわかっていた。しかし、彼に迷惑をかけて欲しくないと、思う“気持ち”と先ほどのお姫様抱っこよる“羞恥心”が重なっており、なかなか言い出せずにいた。だが、状況は切迫していた。このままここに居公園続けるのは先ほどの連中不良にまた襲われる危険性があった。しかし……彼に救われたのは紛れもない事実であった。

あゆみ「うううう………（もお！こ、こうなったら!!）」

そして、彼女はやけになりながらも決心をした。

あゆみ「……………します……………」

龍星「……………ん?」

あゆみ「家まで、その。あ、案内をします。」

龍星「おお!……………案内をしてくれる??」

あゆみ「は、はい……………」ポオー

彼女は龍星イケメンに案内をすることにした。少し顔を赤くし、恥ずかしかった。が、しかし不良達よりこっちの方が助かると思い、決断をした。

龍星「よし！そうと決まれば……」

あゆみ「あの！」

龍星「ん？」

あゆみ「またさっきの、えっと、その、抱っこをするのでしょいか??」

龍星「そのつもりだけど？」

あゆみ「で、できれば。その、”おんぶ”をしてくれませんか？」

龍星「?”おんぶ”？」

あゆみ「はい……」

龍星「うん、わかった。構わないが？」

あゆみ「はい！（よ、よかった〜あのままだったら絶対恥ずかしいよ〜）」

龍星「そうと決まれば……」グイッ！

あゆみ「わっ！」

龍星「よいっしょと!!」

龍星はあゆみを背中に抱え始めた。

龍星「あゆみちゃん、しっかり捕まってるよ！」

あゆみ「は、はい！」

龍星「よし！飛ばすぞ!!」ダッ！

龍星は走り出し始めた。場所は彼女の自宅を目指して……その道中、あゆみはこう思っていた。

あゆみ「(男の人の背中で、すごく大きい。なんか……わかないけど……) 落ち着く……)」

あゆみの自宅前

その後、龍星は休む事なくあゆみをおんぶして走り続けあゆみの自宅^家の玄関前まで来たのだった。

龍星「ここか？あゆみちゃんの家ってのは??」

あゆみ「うん。」

龍星「そうか、やっとなつたか……」

あゆみ「あ、あの！そろそろ……」

龍星「ん？」

あゆみ「えっと、下ろしてもらってもいいですか……」顔真っ赤

龍星「え？ああ……ここでもいいのか？」

あゆみ「は、はい。」真っ赤

龍星「……わかった。けど、まだ足が痛んでいるから肩をかそう。」

あゆみ「あ、ありがとう……ごいませ……」真っ赤

龍星「ん？顔が赤くなっているが？……やっぱり、風邪を引いたか？……」

あゆみ「っ!!だ、大丈夫です……（どうしよう！この人無自覚過ぎるよ〜!）」

龍星「??」

龍星はあゆみを背中から下ろし、そのままあゆみの肩に手を回して、彼女の家の玄関まで連れていった。

あゆみ「お母さん！ただいま!!」

あゆみの母「お帰りく！」トントンガチャツ！

家の中から声がして、玄関からあゆみの母が顔を出し現れた。母の名は坂上楓菜、以前家族の關係が悪かったが、今ではその關係も改善され家族仲良く暮らしている。

楓菜「っ！あゆみ!!貴女、どうしたの?!その足のケガ!!」

あゆみ「お母さん、私……この人に……助けられて……」

楓菜「この人……て!!龍星くん!久しぶりじゃない!!」

あゆみ「え?!」

龍星「どうも、楓菜さん、お久しぶりです。」

あゆみ「お母さん!この人のこと……知っているの?!」

楓菜「ええ、10年ぶりだったかしら?こうして、あなたにまた会えるなんて……」

龍星「楓菜さん、お話しのところ申し訳ないですが話は後でもいいですか?今は彼女のケガを……」

楓菜「っ!!そうわね。龍星くん、あゆみをこっちの中にいいかしら?」

龍星「はい。」

楓菜「すぐに手当てをするわ。」

龍星は、楓菜が発した通りあゆみの自宅の中に入り、そのまま彼女の手当てが始めた。幸いケガは捻挫と打撲だけですみあんまり歩くことはできないが歩けることは出来ていた。その後彼女のケガのこと、龍星があゆみと出会った事の経緯を話した。

数十分後

楓菜「…… そうだったの。あなたがあゆみを助けてくれたのね。」
龍星「はい。と、言ってもあいつら不良たちから逃げきったただけですけどね。」

楓菜「龍星くん…… ありがとう…… あゆみを助けてくれて……」

龍星「いいえいえ、俺はただあの場を偶然にも通りかかっただけですよ。」

楓菜「それでもよ。私はあゆみの母親よ。母親として我が子を守ってくれたあなたを誇りに思っているわ。」

あゆみ「お母さん……」

楓菜「あゆみ、あなたが無事で本当に良かった。」

あゆみ「うん。」

龍星「フフフ、良かった。」

楓菜「あ、そのお茶を入れるわ。ゆっくり飲みなさい。」

龍星「はい。ありがとうございます。」

龍星は楓菜が出したお茶を飲み始め、それをみていたあゆみはある疑問を母親に質問をした。

あゆみ「それより、お母さん……」

楓菜「ん？何かしら？」

あゆみ「藤原君の事なんだけど…… もしかして、知っていたの？」

楓菜「え？ああ…… その事？えーと、あゆみ。実は、私あなたを驚かそうと彼が今日来ることを黙っていたのよ。」

あゆみ「え？…… ええ！……」

楓菜「フフフ、あなたの驚いた顔を見てみたくてもう一週間前から計画していたのよ。」

あゆみ「そんな、一週間も……もお……」

楓菜「フフ、ごめんなさいね。そんなに拗ねないでちょうだい。こうして10年ぶりに帰ってきた彼との再会をさせてみたくなったのよ。」

あゆみ「ええ……」

楓菜「フフフ、それにしても…… 龍星くん……」

龍星「はい？」

楓菜「あなた…… 10年も見ない間にあいだこんなに立派になっていて、帰って来るなんて…… しかも美男イケメンになるなんてね……」

龍星「イケメン、ですか??」

楓菜「うんうん。」

龍星「…… 俺は、普通だと思いますよ……」

楓菜「いやいや、一般の私から見ればあなたは十分イケメンだわ。」

龍星「そんな、大袈裟ですよ。」

楓菜「私は嬉しいわ。またあなたに会えて、あゆみも嬉しそうですしね。フフフ」

リュウアユ「スツゴい笑顔だなあ。お母さんこの人……」ニガワライ

龍星とあゆみは心の中でそう呟き、思った。これが二人が、はじめて心が一緒だったとは誰も気づかないままだった。そして、このあとあゆみの母が言った言葉を聞いたあゆみは驚くことになる。

楓菜「あゆみ、あなた良かったわね♪」

あゆみ「え? どうして?」

楓菜「どうして、てそりゃあ勿論。彼は……」

龍星「ちよ! 楓菜さん!! それh……」

楓菜「あなたの幼馴染みにして許嫁恋人なんだからね。」

あゆみ「…… え?」

龍星「あ……」

それは一瞬だった。あゆみは母から、その言葉を聞いて、体を石の

ように動きを止めたのであった。

あゆみ「……………だ、誰が??」

楓菜「あなたの目の前の龍星くんよ♪そこにいる彼があなたの許嫁なのよ。親公認のね♪」

あゆみ「え?藤原君……………が、私……………の……………」

龍星「あ、ああ……………」

あゆみ「ええええええええええええ!!!ふ、藤原君が!!私の許嫁!!!」

幼馴染み
藤原龍星との再会をした日の夕方、
楓菜
母親から聞いた衝撃的瞬間で
あった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
……………
つ
づ
く

第3話 真つ赤な許嫁と心配する相棒

前回あらずじ

幻のプリキュアに変身する少女「坂上あゆみ」は不良達に絡まれていた所を一人の青年に助けられる。その正体は、10年前に行方不明になっていた幼馴染みの青年「藤原龍星」に再会出合いをする。不良達から彼女を助け、そのままの流れで「彼女の自宅」へと向かうことになり、あゆみは恥ずかしながらも自身の家へ送って貰うことに、自宅に向かった二人を彼女の母親の坂上楓菜さかかみふうなが現れる。あゆみの手当てを受け、今回の訪問の事を話し、感謝される。また話の途中、母親楓菜から龍星彼が彼女あゆみ自身の許嫁である事を告げられ混乱状態パニックになっていたのであった。

これは、10年ぶりに再会した二人の物語である。

だが、それよりも彼女はある疑問を母親に聞いた。

あゆみ「………… お母さん………… 私に『許嫁』って、いつから決まっていたの…………」

楓菜「ウフフ………… それは、10年前からだったのよ♪」

あゆみ「10年前………… そんな前からだったの？」

楓菜「ええ♪貴方達が公園で、ね…………」

あゆみ「え………… 私たちが公園で…………」

龍星「………… あゆみちゃん。俺たちが約束した日のこと話したよね？」

あゆみ「え？………… うん………… さっきの…………」

龍星「そうそう、でも。実はそのあと、ちよつとした『続き』があるのだよね…………」

あゆみ「え？………… つ、続き…………」

楓菜「あらくその様子だと、全然覚えていないみたいわね。」

あゆみ「え？」

龍星「俺があゆみちゃんを公園で見つけて、二人で話してた時、俺の両親と楓菜さん達が影で聞いていたみたいで…………」

あゆみ「………… え？………… それって、も、もしかして…………」

龍星「ああ………… 俺達二人が『約束した日』の時、公園の影で俺達の…………」

楓菜「そう、貴方達の話聞いてて、私達保護者だけで話をしてあなた達を『許嫁』いいなすけにして、そのあとの夕方、貴方達を呼んでその事を話したのよ。その時、貴女っては嬉しくって嬉しくってジャンプしながら喜んでいて、そのあとなんて言っていたかしら？でも、あのあとのパーティーは本当、楽しかったわ〜」

龍星「……………だ、そうです…………」

あゆみ「え?・・・・・・・・・・・・・・・・ ええええええええ!!!」顔真っ赤
龍星「おう!?お、お落ち着いて、あゆみちゃん。」

母親からさらに発した言葉を聞いて驚きを隠せずに、大声をあげた。彼女が驚くも無理がなかった。

あゆみ「(どうしよう!わ、私!お、落ち着けないよー!)」顔真っ赤

楓菜「・・・・・・・・・・・・・・・・ フフ・・・・・・・・ 良かったわね.....」

龍星「ちよつ!楓菜さん。ゆっくりしている場合じゃ.....」

楓菜「あら〜?もしかして、あゆみく・・・・・・・・ あなた、学校で恋人ができたのかしら?」

龍星「え・・・・・・・・ そう・・・・・・・・ なのか・・・・・・・・.....」

あゆみ「!!ち、違う!違う!!私はまだ・・・・・・・・ そんな

事・・・・・・・・ 恋人は・・・・・・・・ その・・・・・・・・ えっと!!まだ、いないよ・・・・・・・・」

龍星「・・・・・・・・ いないのか、良かったぜ。」ホッ

あゆみ「え?」

楓菜「あら〜良かったわね。龍星くん♪あゆみはまだ恋人がいないみたいよ。(この子、今さつき安心してたわね♪フフフ.....)」

龍星「はい・・・・・・・・..... て!..... は!..... あ、..... いや、これはその・・・・・・・・..... ああ!そうそう!俺はそろそろ戻らないと!!まだ引越しの片付けがあるので.....」

あゆみ「(ふ、藤原君、なんか嬉しそうだった..... ??)」

楓菜「ええくせつかくなんだから、ご飯を食べていかないかしら〜」

龍星「す、すいません。まだ片付けが山ほどあるので、それを片付けないと。」

楓菜「あら〜残念、だわ〜♪」

龍星「……ちよつ……………楓菜さん……………今、わざと……………」

楓菜「フフフ♪それだったら、あれのことお誘いをした方がいいんじゃないか・し・ら？」

龍星「え？あ、ああそ、そうですね。（楓菜さん、ノリノリだなあ！おい！どんだけテンション高くしているんだ?!この人は!!アア！もう！こうなりやあやけだあ!）…な、なあ…あゆみちゃん……………」

あゆみ「っ!!は、はい!!!」

龍星「……………今日は遅いからあまり話ができなかったけど、また今度の日曜日にも話をしないかな？色々とその、この10年の事を……………聞かせてほしいなあ。なんて……………」

あゆみ「え……………こ、今度の日曜日、ですか?……………（え?!も、もしかして、これって……………!）」

龍星「うん、どうかな?」

あゆみ「……………えつと……………わ、私で良ければ……………」

龍星「ありがとう!!じ、じゃあ!!また今度の日曜日にな……………」

二ツ

あゆみ「っ!!は、はい!」ドキッ

龍星はそう言い玄関の方へ向かい、靴を履いた。楓菜も玄関に向かい見送りをしに来たのであった。

楓菜「龍星くん。またね。」

龍星「はい。お邪魔しました。」

あゆみ「あ、あの!待って!!藤原くん!」

龍星「ん?」

龍星が出ようとしたとき、あゆみに呼ばれ止まる。

あゆみ「あ、あのくそのく」モジモジ

龍星「ん？」

あゆみ「今日、助けてもらって、あ、ありがとう!!また、休みの時
にお願いします!」

龍星「……フフ…… ああ!またね。あゆみちゃん!」

あゆみ「うん!」

あゆみは笑顔で答えた。それを見てた彼は嬉しく笑い、そう言いながら玄関を出て、あゆみの家から自宅へと向かった。

あゆみ「…… つ!!はあく←今までで一番緊張したよ……」へ
ニヤヘニヤ

楓菜「あらあらくあなた、ものすごく緊張してたわね♪あゆみ♪」
あゆみ「もおくお母さん、絶対わざと話していたでしょう!それに!!私に『許嫁がいる』って、何でもつとはやくに言わなかったの!!ものすごく驚いでいたからね!!」

楓菜「だって、あなたのそういう可愛いところを見てみたいじゃない♪」

あゆみ「だ、だからってああいいうことしなくてもいいよくしかもあの人
がわ、わ私の許嫁だったなんて……」

楓菜「あらあら?あゆみは龍星^彼のこと、嫌いなのかしら?」

あゆみ「つ!!そ、そそそんなことは…… 全然思って、いない、よ……」モジモジ

楓菜「だよね。あなたが彼のことをいやな人だったら、さっきのデートのお誘いを断らないからね♪」

あゆみ「つ!!そ、それは、断る理由がないと言うか、ちよつと、話してみたいと言うか。そのえつと、と、兎に角、藤原君が嫌いってことじゃないよ。」顔真っ赤

楓菜「ウフフ、そうね。分かったわ♪さあてと、あゆみご飯の支度

をするから少しそこで大人しく待っててちょうだいね。」

あゆみ「は、はい。」顔真っ赤

顔を真っ赤にしたまま彼女は母親とリビングに向かった。

あゆみ「龍星くん、か………ちよつと…格好いい、かも………」

楓菜「(フッフ…)」

あゆみは心の中でそう思いながらリビングに向かった。しかし、その後しばらくは母親楓菜にいじられていた。

龍星「フウくまさか楓菜さんにいじられるとは思わなかったぜ……」

あゆみの家から出てきた龍星は、港町を歩いて自身の自宅へと向かっていた。もちろんそれは、先ほども言っていたように、彼は10年前、突然故郷から遠い別な場所へ消えてしまい、その後、他の世界を武者修行をして回り、帰ってきたのだからだ。

龍星「でも、それよりも俺の許嫁幼馴染があんなに可愛くて、美人になっているとは思わなかったぜ。」

10年の月日が過ぎていき、久々に会った許嫁幼馴染は美しく、そして可愛く見えてしまい彼自身驚きを隠せずにいたのであった。

龍星「(あゆみちゃん、本当に会えて良かった。)フフ、さあてと早く帰って、部屋の整理整頓をするか。久々だからな、色々と片付けをしないとなく」

そんなことを呟いていたとき、突然どこからか声が響いた。

?? 『…… 10年ぶりになる、彼女許嫁との感動の再会はどうだったか?? 龍星。』

龍星「ん? フフ、何のことなんだい?? 相棒?」

そう言い、彼は自身の首に掛けている龍のエンブレムが入っているネックレスを取り出し見ていた。よく見るとその龍のネックレスの目が光輝いており、どうやら先ほど龍星に話しかけていたのはこのネックレスであることがすぐに分かった。

?? 『ん? いや、別にお前さんに深入りするつもりはないが、せつか

くの再会なんだからさ。なんか他にも、もつと話すことでもなかったのか?」

龍星「そりゃあ、俺だって話したいことは山ほどあるけど……なんか一度話すと長くなりそうだから、今日は一度だけでも会っておきたかっただけだったし。それに、さっき彼女の母親楓菜さんにいじられていたのを見てただろう?」

??『そりゃあそうだから……それと、後、その……』

龍星「んん? おいおい、どうしたんだよ。コアスル?? なんか言いずらそうな感じになって……あんたらしくないぜ。」

コアスル『いや……ただ……まさか、お前さんに心配されるとはな……』

龍星「この数十年間あんたとずっと一緒だったんだ。あんたの気持ちにはわかるに決まっている。」

コアスル『……だな……』

龍星「それに、アンタが話したがっている話題はそっちじゃあないだろ?? ここだと話しにくいからどつかあの影で話そう。」

コアスル『……すまん』

そう言いながら龍星は二人で話しやすくするようにビルの影に向かった。そして、コアスルと呼ばれた声の主は、何かを訴えるように真剣な口調で話しかけた。そして、その話題は自分達自身ことを話し始める。

龍星「ここならいいか。さてと相棒。話はなんだい。」

コアスル『……なあ、龍星。』

龍星「なんだ? 改めて??」

コアスル『単刀直入に言うが、お前の彼女許嫁にも俺達のことを隠しとくのか?』

龍星「え?」

コアスル『俺たちは、一度この世界とは別の世界に渡り歩き。ずっと、武者修行の旅をして、やっとの思いでこの世界に帰って来たんだ。』

この先の未来、この世界で俺達はいったいどんな戦場いくさになるかもわからん。だから、なんだ？その………いくら何でも、俺達のこの世界で俺達の正体を隠し通すことは厳しくなるぞ。もしも、俺達の事を彼女に知られたら、その時はどうするんだ？龍星？』

龍星「そうだな。このまま俺達の本当の正体を隠し続けることは難しいのかもしれない。最初に話をしたとしても彼女が受け入れるのは難しい。それに、あのタイミングで言えるかといえば難しいと思えるぞ。」

コアスル『そう、だな。じゃあ、どうするんだ？さつき、話していた今度の休みにでも言うのか？』

龍星「………それは、そうだな。一樣は、最低限のことを話すつもりではいるが急に俺達のことを話して怖がられるかもしれない。」

コアスル『確かにな。いきなり俺達の正体を話していたとしても、その受け入れるには余りにも荷が重すぎるもんな。』

龍星「そうだな。そんな時はそんな時でなんとかする。あまり深入りさせるつもりはないしな。」

コアスル『“そんな時はそんな時で”、か。』

龍星「ああ、だから、俺は、俺が信じる道を進んでいくだけだしな。」

コアスル『フフフ………そうか。お前らしいな。まあ、それでこそ、超闘戦士だな。』

龍星「ああ、そうだ。アンタから引き継がせたんだぜ。」

コアスル『ああ………そうだったな。だが、忘れるなよ。久々10年ぶりにお前の故郷世界帰ってきたんだ。今までの修行を思い出していけば、お前は……絶対に負けはしない。』

龍星「ああ………わかつているぜ。」

P i p p i p p i p p i !!

突然^{コアスル} ネットワークから音が響いた。

龍星「ん？どうした？」

コアスル『……………いや、^{本部}HQからの連絡だ。』

龍星「本部から？」

そう言いながら、ネットワーク^{コアスル}は光を発した。それは、一種の光ディスプレイ^{コアスル}みたいであり、ある資料ファイルを出した。

龍星「相棒……………緊急か？」

コアスル『いや、これは違う。』

龍星「違う？」

コアスル『ああ……………どうやら……………完成したようだな……………』

龍星「完成?……………コアスル……………話しの意図が全然わからないが……………?」

コアスル『え?……………ああそうか、まだ言ってなかったな。お前があゆみ^{許嫁}の家に行く前に本部にいる、イシユメールとエイハブ達に頼んで、情報をまとめさせてもらっていたんだ。』

龍星「情報?コアスル、お前何を頼んだのだ?」

コアスル『ああ、ちよつと気になることがあつてな。まあ、それ以前に情報を集めることが、俺の今の仕事だからな。』

龍星「……………それは……………お前の知りたいことだからではなくて?」

コアスル『フフ、その両方さ。それに、よく言われるだろう?”情報こそ戦^{いくさ}を征す”と。』

龍星「確かに、で。その情報とやらはいったいなんなんだ?」

コアスル『ああ、この世界^{故郷}帰ってきて突然、各地で奇妙な邪気と波動^{コアスル}を感じただろう?』

龍星「それって……………突如現れた未知の波動^{コアスル}と邪気の事か

？被害情報があったらしいがわずか数時間、いや、数分でいつの間にかきれいさっぱりと消えて、街も元通りになっていたとか言っていた？」

コアスル『その通り。ここ数年と数が月ほど前から小泉学園を中心とした、日本各地でその謎の超常現象が発生していて、その時に隊員を現場に向かわせていたがもう終わっていて何もなかったらしい。』

龍星「……俺達がいらないこの10年間でそんな現象が起きるとはな……」

コアスル『んん??……これは?……』

龍星「どうした??コアスル」

コアスル『フフフ……なるほどそうか。彼女達が……』

龍星「何か分かったのか?相棒??」

コアスル『ああ……分かったよ……龍星……』

龍星「ん?」

コアスル『小さい時に俺がお前に昔話を聞かせたの覚えているか?』

龍星「俺が小さい時、あんたが話してくれてた、俺達と同じ光をを照らす。伝説の光の戦士達の、ことか?」

コアスル『ああそうだ。よく覚えていたな。』

龍星「ああ、あの話は好きだったからな、で?その作り話とどう関係が?」

コアスル『……実はその作り話が本当だった、と言ったら??』

龍星「え?あ!もしかして……」

コアスル『そう!!察しが早くて済む。』

龍星「やっぱり……か……なくんかそんな気がしたよ。」

コアスル『そういう事。どうやら彼女達が俺達の変わりに戦っていたみたいだ。』

龍星「……」

コアスル『……それと、龍星。』

龍星「ん?」

コアスル『…………』”伝説の光の使者”だ。間違っているぞ。』

龍星「あ………… 使者か………… すまん。」

コアスル『………… まあ似た者同士だな。実際、彼女達は戦っているしな。』

龍星「そうか……………」

コアスル『だが、情報があまりにも少なすぎて彼女達の正体までは流石にわからない。』

龍星「なるほど。それで、その超常現象はどの場所が多いんだ？」

コアスル『一番被害が多いのは、関東地方だな。もはや超常現象の中心部だ。』

龍星「ふーん。ん？相棒、日本だけがその超常現象が発生しているのか？」

コアスル『いいや、世界各地でこの現象が発生してはいるが、海外よりこの国日本の方が一番被害が多い。特にこの関東地方が一番だな。もはや超常現象の中心核だな。』

龍星「そうか、それじゃ………… 関東が一番被害が多いのは？」

コアスル『それが、この超常現象はどうやら関東各地で起こっているから具体的にどれが発生源なのかは俺にもわからない。』

龍星「これでは、俺達でもお手上げ、か…………」

コアスル『でも…………』

龍星「でも？」

コアスル『この日本、いや、この世界で一番被害が大きかったのは東京湾を中心としたこの横浜らしい。』

龍星「………… 本当か？コアスル？」

コアスル『ああ、本当だ。龍星。』

龍星「で、その場所は？」

コアスル『この場所さ、”横浜みなとみらい21”ここが一番被害が大きかった場所だ。』

龍星「………… なぜ、横みなとみらい浜が被害がデカいんだ??」

コアスル『それは、俺にもわからない。だけど…………』

龍星「だけど？」

コアスル『だけど、一つわかってるのはこの場所で光の使者が戦っていた。先月ほど前、この場所で巨大な怪物が赤レンガ倉庫付近で出現して大暴れしていたらしく、その化け物をなんとか倒して、この街を守ったそうだ。』

龍星「先月ほど前と言え、俺達があの人達と修行していた?？」

コアスル『そうだ。』

龍星「あの時の波動氣と邪氣は、この場所を記していたのか……」

コアスル『ああ……』

龍星「……目撃者はいたのか?？」

コアスル『ああ……それも”たくさん”、な。』

龍星「え?た、”たくさん”?？」

コアスル『そう、これを見てください。』

龍星「ん?」

コアスルの龍の目が輝き出して映像を出した。そこには、可愛らしい衣服を着て、自分達よりも大きな怪物と戦っている三人組の少女達が写っていた。それも、映像はニュース番組の特番として報道されていた。

龍星「これは……マジかよ……」

コアスル『流石に、お前さんでも驚いたか?』

龍星「当たり前だ!女の子が自分達よりもデカイ怪物相手に戦っているんだぞ!」

コアスル『そうだな、俺も驚いている。』

龍星「……この映像は、さっき言ってた先月のか?」

コアスル『そうだ。先月のだ。』

龍星「映像は、これだけか?」

コアスル『いや、他にも映像があるはずなんだが、それは全部消されている。』

龍星「消されている?なぜ?」

コアスル『それは、俺にもわからん。ほとんどの映像はなぜか消え

ていた。』

龍星「消えていた……ね……怪しいモノだな……」

コアスル『……だな。その他は、ほとんど目撃者の証言だな。でも目撃者も多いから説得力がある。』

龍星「そうか。」

コアスル『どうする、龍星?』

龍星「なにがだ? 相棒??」

コアスル『どうやって、彼女達を探す?』

龍星「うーん、俺達から接触すると言われても彼女達のことを知らない。流石にどうやって探せばいいのか分からない。」

コアスル『と、言うとは?』

龍星「彼女達から出てきてもらうしかないだろう?」

コアスル『……そうだな。ここはおとなしく待つしかない、か。』

龍星「アア……そうだな。よし、相棒。早く家に戻ろうか。おばあちゃん達が心配しているところだ。」

コアスル『そうだな。戻るか。』

龍星とコアスルはそう言い、ビルの影から出て街を歩いて自宅へと向かった。

龍星「(さてと、これからどうしようかな……」

伝説の光の使者……か。

……
「どんな人達なんだろうな……」

龍星は、気になったことを街の夜景を見ながら帰り、自身の家に歩み始めた。

だが、

彼らは知らなかった、

光ブリキュアの使者は彼女三人達だけではなく、数十人人ほどいたことを……

そして、彼女あゆみの正体を知ることになることを……

さらに、あゆみも知ることになる……

龍^彼星が何者であるのかを……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
……
つ
づ
く